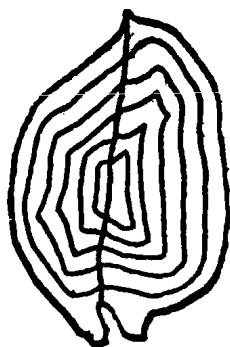


女であること(一)

川 端 康 成



新 潮 社 版

女であること(一)

昭和三十一年十月十五日発行・昭
和三十二年一月十八日九刷・著
者 川端康成・発行者 東京都新宿
区矢来町七十一佐藤亮一・発行所
株式会社新潮社・印刷者 東京都
千代田区神田神保町三ノ二三塚田
重・印刷 塚田印刷株式会社・製本
東京都千代田区神田猿樂町加藤製
本所・定価式百八拾円・地方
売価式百九拾円

落丁本は本社又は御購買書店で取替へます。

Printed in Japan

目 次

あなた、たいへん……………七

ここにも、ひとり……………四

下をながめて……………六

いいえ、なんにも……………七

その日から……………二六

むがしを今に……………一四八

いつてらっしゃい……………一五五

白いしゃくやく……………一〇一

安心して……………三三七

挿 装
絵 幀

森 勅使
田 河原
元 霞
子

女であること

あなた、たいへん

「あつ、しもた。半どんやわ。」

古い水車の軸の火ばちに、頬杖ついていた母の音子は、大きなからだを泳がすように、廊下へ出た。

電話をかける声が、いままでとうってかわって、生き生きと聞える。

「三浦です。土曜日やの、うっかりしてましてん。いま、子供をやりまっさかいに、お願いします。三万、三万円ね。へえ、じきいきますよってに。すみません。」

姉のいと子は、妹の方を振り向いて、

「さかえちゃん。そとへ出たら、ハイ・ヒールのポスター、氣イつけて見て来て。」

「……………」

「ファッションのモデルさんたちがね、デザイナーの先生がたと寄って、ハイ・ヒールいう劇団、つくらはったらしいねん。」

しかし、さかえは姉に、目を向けようともしないで、自在かぎの下のカス・ストオヴに、形の

いい脚をあたためていた。

高い天井からの自在かぎには、大きいあられの鉄びんがかかっている。

田舎家のいろいろ風で、まきの形の素焼を組んだ下に、ガスがもえている。

太く強いるぶちは、半ばをたたみに切りこみ、半ばは板の間に突き出ている。板の間は一段低い。

大きい水車の軸の火ばちは、炉とはなれて、その広い板の間のまんなかにある。火ばちに脚をつけて、まわりには、わら編みのいすをおいて、丹波木綿のざぶとんがのせてある。

自在かぎの木の鯉が、古光りしていて、その下のさかえのナイロンのくつ下と、ひどく不似合わないように、この三浦商会の応接間は、すべてがっしりと、古色をおびて暗い。

腰高な窓は北向きの上に、すりガラスで、鉄棒がはまっている。その鉄棒はだいぶさびている。昼間も明りをつけ、火ばちの上の電灯のかさは、これも民芸風で、子供の雨がさほど大きく、下にもつるした紙が、光りをやわらげている。

いと子の派手なきものと、つり花生けの花とが、この部屋にあざやかな色だ。

いと子は火ばちに、母と向い合っかけていて、十分ばかり前に、

「さかえちゃん、いっぺん、見合いしてみやへんか。うちの事務所につとめてる、桂木さんという人、こいさんも知ってるかと思うけど。」と、言った後だった。

「そんな人知らんけど、うち、見合いなんて、死んでもいややわ。」



「なんでまた？」

「向うはうちのこと、ええ言わはるにきまつたあるもん。」

つり花生けは、いと子のうしろの塗りだんすの上に、木わくを立てて、つるしてある。大きい船形で、白百合とスウキイトピーが、たっぷり入れてあった。

さかえが横ずわりした、たたみのうしろにも、鉄金具のごつい、塗りだんすがある。

「なあ、はよいて来て。もう十二時過ぎてるわ。」と、母はふくさ包みを渡したが、だまって出てゆくさかえに、

「ついその銀行イいくのに、なんで、ハンド・バッグいるの？」

「女やもん。」

「あの子、いつも、あんな風でつか。」と、いと子は母に聞いた。

「そうやな？ なんじゃかんじゃ、氣イ悪うすると、三日でも、四日でも、なにもせんといやはる。」

「あたしが来るたんびに、きげん悪いのと、ちがいまっしゃるか。」

「あんたとちごて、きつい氣イヤさかい……。」

「このうちも、帰ってみると、しんどいことばかりでんな。」

「ほんまに……。このごろまた、神経痛がおきてんね。」

母は炉ばたに、足をのばしてさすった。

「さかえちゃんに、おふろのふちでも、たまに、みがかしたらどうです。あたしのいる時は、ぴかぴか光ってたわ。あんなきたないのに、ようはいれますな。」

湯船のふちに巻いた、しんちゅう板のことである。

入口の柱やガラス戸のすそにも、しんちゅうの板を張ってあるが、やはりよごれて、くろずんだ柱と見わけがつかない。

「きびしょ取ってんか。」

「きびしょでっか。」と、いと子は水車の軸のふちから、きゅうすを持って立ちながら、

「そのたたみも、えらいきたのになりましたなあ。」

「そない言わんといて。」

「なんや。お母さんに、同情してんのでっせ。」

いと子は円いわらいすにすわって、板の間から、いろりに向った。黒地に強い黄の菊の羽織で、その模様は、花びらとも菊とも思えぬほど大きく、京都あたりの若い芸者の、コウトにでも見られそうな派手さが、古びた部屋に浮いていた。

母は古染めつけの小さいきゅうすで、小さい茶碗に、玉露をたらしした。

ひとまとめに、うしろ髪を上げたところにも、白毛が目立っている。肉づきのいい大がらが、

かえって年をかくせないという不器用さか、五十に近い人に見える。満で言えば、まだ四十四になったばかりだ。

いと子は自分の前の玉露を、飲もうとしないで、

「それ、なんや、くすんでまんな。」

「これか。」と、母は羽織とも、半コオトともつかぬ、毛織のそでをつまんで見た。

「唐物町、通ったら、西田はんがくれはったんや。」

「どぶ池に、なんぞ用あったんでっか。」

「あらしまへん。今はもう用はないけど、昔からのおなじみさんが多いし、じゃんじゃん商売してはるのを見たら、ちっとは、氣イ晴れるやないか。」

「お母さんは、東京で生まれて、女学校も東京でっしやる。東京弁つこて、心機一転しなはれ。」

「おばあちゃんが、やかましかったんや。東京弁やと、返事もくれやはらへなんだ。大阪の嫁は、(きびしよ)言わんと、あきまへんね。一事が万事……。あんたの年には、二人の子持ちやった。

おばあちゃんはさかえを見て、まもなく死なはったけどな。また女かいな、そやけど、まあ、こんどの子オは、えらい美人や言うて……。」

取引きの銀行まで、五、六町だから、今日のようにいそぎの時は、たいてい、女乗りの花車な自転車走らせろ。

しかし、母にも姉にも、ふきげんな顔で、家を出たさかえは、紺のスエドのハイ・ヒールで、古い町通りを、ゆっくり歩いた。

オッパアも明るい紺で、えりには裏地のしまが出ている。そのつまったえりに、あごを引いて、日のさす道の色が、春めいて来たのを見た。

どの店の前を通っているか、さかえは見なくてもわかる。生まれて育った町だ。大阪の真中では、わずかに戦火をまぬがれた町である。家々は昔の間屋町のおもかげをとどめていた。

無論しかし、家のなかには、世の移り変りがあつた。住む人もちがつた。

ゆいしょある店が料理店になったり、新興宗教の支部の大きい看板を出したりしているのもある。

さかえの家も、大波にゆれた。三浦商会の全盛は、戦後、三、四年のころにあつた。

古い店は店として、父は戦後の新しい商法に手をひろげ、もとの繊維品のほかに、綿やほふたいまで、また、たたみ表やゴム管、なんでもかでもあつた。

小さい焼けビルを、早く買って改装し、古い三浦ではなしに、戦後派成金として知られた。

「お父さんの寝てやはるとこ、ちょっと、のぞいてみよ。」

父がめずらしく家にいる日、さかえは学校へ出がけに、そんなことを言うようになった。

「うち、お父さんの顔、長いこと見てへんわ。ゆうべ、帰らはったのもしらんし。」

女もある。もう、子供もある。そういううわさが、古風な応接間でささやかれるのは、さかえの耳にもはいついていた。

いと子、さかえと、女の子だけだった父は、いと子が嫁にゆくころに出来た。その男の子を、溺愛しているという。

その「ぼんぼんさん」に、なにを買って来てほしい、かにを買って来てほしいと、女は毎日、会社へ電話をかけてよこすという。

母は人前をつくろって、つまらぬことにも、おもしろそうに振舞って見せる。それがさかえには、母まで自分を突き放しているかのように思える。

さかえは女であることはいやさが、いろいろと感じられはじめて、男装してみたいと望みながら、少女期をすごした。

さかえが高等学校を終えぬうちに、三浦ビルは人手に渡ってしまった。その前後に、姉のいと子は派手な結婚式をあげた。

幼いうちから、さかえは姉と性格が合わなくて、いと子のとついでゆくのには、ほとんどなんの感傷もなかった。

さかえと二人きりになった母が、

「あんたもこのうちから、お嫁に出られるやろか。この家にねばってんのが、お父さんにたいす